

篆刻異聞

— 木村兼葭堂から李顕相まで —

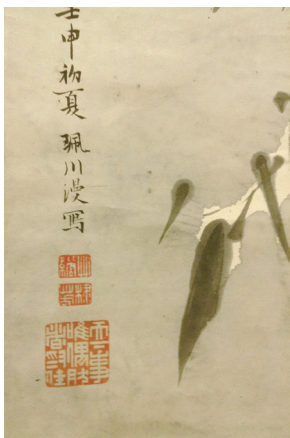
図版



(図1)



(図3)



(図5)



允執
其中



元重
奉子
印

(図2)



(図4)

高橋博巳

東アジアの篆刻は戦国時代の銅印に始まり、ことに明代以降、石材が用いられるようになってからは、文人趣味の一つとして広く行われるようになった。¹⁾ここではこの小さなツールが通信使行による日朝間の交流に果たした小さくない役割について、二三の事例を報告したい。

そのためにはもはや周知のことながら、あらためて木村兼葭堂(一七三六―一八〇二)たちの活動に触れないわけにはいかない。兼葭堂と福原承明(一七三五―一七八)の手になる『東華名公印譜』(合離細合斗南序、宝暦十四年「一七六四」刊)こそは、通信使を介して東アジア学芸共和国の形成を促した重要な記念碑だからである(図1)。兼葭堂の活動は篆刻ばかりでなく、『兼葭雅集図』の出来映えによってもソウルの知識人の注目を集めた。わけても洪大容(一七三一―一八三)は「斗南の才、兼葭の画、承明の筆」などを取り上げ、これらの「種種風致は、即ち我が邦に論無し。之れを齊魯江左の間に求むるも、亦た未だ得易からざるなり」(『日東藻雅跋』、『湛軒書』三、「韓国文集叢刊」248、民族文化推進会、ソウル、二〇〇〇年)と絶賛して、二年後に同様の文人を尋ねて北京に赴ききっかけとなった。その後の華々しい展開はよく知られているとおりである。²⁾

この『東華名公印譜』に加えて、近年公刊された『葛子琴篆刻集』(太平文庫66、二〇一〇年、太平書屋)を見ると、そこには成大中(一七三二―一八〇九)と元玄川(一七一九―九〇)のために彫られた印影が収められている(図2)。葛子琴(一七三八―一八四)もまた兼葭堂グループの一員として「浪華スタイル」を体現し、浪華の雅交には欠かせない人物だった。頼春水(一七四六―一八一六)が『在津紀事』で伝えるところによれば、春水と子琴は雅会に毎回参加し、と

くに子琴は賞会に欠かせない人物として、「一時、都下の集、子琴無ければ樂しまず」と言われるほどだったという。その杯盤狼藉の詩会においても、

笑謔せざる莫く、詩成らざる莫く、或いは二三篇を累ぬるに至る。而して其の字句は巧緻を極む。又た数日を過ぎて前詩の数字を改め、正を同社に請う。蓋し子琴は宴会に於いて、以て樂と為さずして、以て学と為すなり。

というように、「宴会」を「笑謔」で「楽しみ」の場にすると同時に、そういう場で作った「二三篇の詩」が「巧緻を極め」ているのを、「数日」後さらに推敲して磨き上げ、あらためて他のメンバーの意見を求めるといふ具合に「学び」の場でもあったというのである。

また「子琴の御風楼は玉江橋の北畔に在り。西南豁達、月に宜しく雪に宜し」と記され、風流に関しても冬は雪景色を楽しみ、夏は夏で、

夏の夜、炎蒸して寐られず。夜半月に乗じて起ちて行き、子琴を訪う。子琴未だ寐ず。余が蹻音を聞き、即ち欣び迎え、楼を開いて小酌す。將に帰らんとすれば、子琴必ず送って玉江橋に到る。又た共に橋欄に倚り、聯吟して別る。

というふう洗練を極めていた。そうした風雅のうえに、

子琴は、人目して詩人と為す。而れども其の学は該博にして、究討せざる莫し。最も左氏に熟し、素難を治む。問う者其の精到に服す。其の人謙虚にして、叩かざれば言わず。

(以上、巻上、『春水遺稿別録』一、『新日本
古典文学大系』95、岩波書店、二〇〇〇年)

というような一面が控えていた。「左氏」は「春秋左氏伝」、「素難」は医書の『素問・難経』。その該博な知識を内に秘めた「謙虚」さが、「浪華スタイル」を奥ゆかしく伝えている。

2

こうして各地で贈られた印影を、成大中は帰途の船中で見比べて楽しみつつ、次のような評価を記している。

中村三実³は刻して印章六顆を送る。時韞九顆、退石・玄川各二顆、且つ各私印譜一券を致す。日本人は雅より凶章を善くし、所謂「一刀万象」なる者、天下に名ありて、今行わる。見る所、則ち三実を最と為す。江戸の平鱗・西京の長公勲は之れに次ぐ。浪華の木弘恭・福尚修輩は又た其の次なり。

(『榎上記』五月十五日の条)

『一刀万象』三巻は、正徳三年(一七一三)池永一峰、号道雲によって作られた、「本邦印譜の中でも屈指の名譜」(水田紀久氏「日本の印譜」、『日本篆刻史論考』青裳堂書店、一九八五年)だった。そうした下地のうえに、篆刻趣味が徐々に浸透した結果、中村三実がベスト(図3、尼崎市H・P)、「平鱗」こと沢田東江(一七三二〜九六)と「長公勲」すなわち長青楓(一七一六〜七四)が次善、兼葭堂と福原尚修は「又た其の次」という評価となったわけである。頼春水は先の『在津紀事』巻上において、「子琴は笙及び箏箏を善くして、篆刻は妙

手と為す」と高く評価しているが、大中の眼鏡にはかなわなかったようだ。

そこで注目されるのは中村三実であるが、残念ながら今のところ詳細を明らかにすることができない。三実より「九顆」を贈られた時韞こと南玉(一七二二〜七〇)の日記には、明和元年(一七六四)一月十四日に「牛窓」に到着して、備前藩諸儒の出迎えを受けたさいの印象が次のように記されている。

此の州の儒、頗る文雅の礼貌有り。携うる所の文房も亦た皆な精好にして、紙は中華に非ざれば用いざるなり。(『日観記』第七)

備前諸儒の「携うる所の文房」はことごとく「精好」で洗練されており、総じて「文雅の礼貌」を備えていたというのである。このいわば「備前風雅」に心動かされたところへ、

和田、其の友中三実の印譜の序を請う。三実、字は子楳、印は凡そ七十有五、各体之れを備う。其の印学に深き者と知る可きなり。其の譜を留めて、之れに叙せんことを許す。

という展開となつて、感心の度合いは一段と深まったようだ。「和田」は、「和田邵、号一江、州の文学」である。その一江が南玉に向かつていう。

僕が友に中村巴陵なる者有り。性、印章を篆刻することを好めり。嘗て印譜を刻す。諸君の西より来たと聞きて、僕に因りて小技を呈せんと願う。乃ち之れを携えて来たる。倅惚の中と雖も、一たび之れを閲して、若し数語を巻端に賜ることを得ば、豈

に唯だ巴陵が幸いのみならんや。僕も亦た幸い為ること少なからず。至囑しご至囑。〔榎客萍水集〕二、都立中央図書館中山文庫蔵)

「倥偬」は事が多く忙しいさま。「至囑」は依頼する意の書翰用語。南玉はそれに答えて、

印章は僕が癖愛する所の者、当に卷に弁じて之れを還すべし。但だ恨むらくは、未だ巴陵と一談を得ざることを。若し足下の紹介に因りて、巴陵が好手を得て、賤名と号字とを刻して以て帰らば、則ち幸いならん。如何如何。

と格別の関心を示し、「鄙が求めんと欲する所の者、当に録奉すべし」といって、

僕、数本の名印を得んと欲す。大ならんことを要せず。但だ奇ならんことを要す。未だ多く得ること願いの如くなる可からずと雖も、願わくは点ずる所の者三四本を得んことを。

と注文している。「鄙」と「僕」は同義。割注には、「別に印形を図して、之れを示す。中に点を加うる者有り」と記されている。大きい必要はなく、ただ「奇」であることが求められている。同じように大中小もまた、

印譜、儘く奇品なり。恨むらくは一たび其の手を傭いて拙者が名姓をして諸を群玉の所に留めしむるを得ざることを。

と云って「奇品」であることを認めている。そして、「尽く刻するこ

とを得ば、則ち固より幸いならん。倘し以て願ひ難しと為さば、点を打する者を得ん」といって、同じように割注に、「印形を図して、之れを示す。中に点を加うる者有り」というように、南玉に勝るとも劣らない熱心さだった。さらに気難しい金退石(一七〇七〜七二)でさえ、「敢えて多く求めず。只だ此の一套、倘し感諾を蒙らんや否や」といって、「一印形を図して、之れを示す」というほどで、元玄川もまた牛窓では、「筆硯整楚にして、各二を置き、枝筆は拇指の如し」とか、「大小二十卷の紙を納めて札と為し、書を求めて箱に各色の唐紙を盛り、大筆二枝を上置き」〔乗槎録〕二と記して、南玉の先の観察を補っている。

このように三実の篆刻は、初めから一行の注目を引いていたことがわかる。この熱心な依頼に一江も意外だったのであろう、

巴陵は激職に居れり。回程の期、知らず果たして雕刻せんや否やを。成否は諾し難し。試みに諸君の為に、之れを維持せん。

と慎重に答えている。それに対しては南玉が、

巴陵、未だ半霄の雅有らず。何ぞ副せらるることを望まん。第だ異方の奇珍なるを以て、米家の宝と作さんと欲す。覚え欲する所の者奢る。惟賢、之れを恕せよ。

と云い添えている。「半霄の雅」は「半霄」とあるべきところか。「米家の宝」は、米芾(一〇五一〜一一〇七)所蔵の名品に擬えていう。果たして帰途の四月十五日の南玉の日記には、

市浦直春、中三実の刻する所の印章九枚を致す。篆刻は大いに平

鱗に勝る。各色の花簡を以て之れを謝す。 (『日観記』第九)

と記されているので、一行の願いに中村三実は十二分に答えたことがわかる。先に見た大中の評価とも一致している。このたび印を持参した「市浦直春」は、「号は南竹、類宮文学」だった。ソウルでの反響はどうだったのだろうか？

3

さて一八一一年(純祖十一・文化八)、これが最後となった通信使が対馬にやってきたとき、製述官は李顕相、号太華だったが、出迎えた人々のなかに古賀精里(一七五〇〜一八一七)に随行した草場佩川(一七八八〜一八六七)が含まれていた。詩画をよくした佩川は克明な記録をのこしているが(『津島日記』西日本文化協会、一九七八年)、筆談を収めた『対礼余藻』の「二十三日の筆語」で注目されるのは、太華が船出するさいに金祖淳(一七六五〜一八三二)から贈られた扇面を、「今、佩川足下を見るに、乃ち海上の高人なり。此れを以て奉呈せん。幸いに領して情において忘るること勿れ」といって、佩川に転贈していることである。佩川は、

物、其れ美なり。矧いほんや堂々たる名公の詞筆をや。野人、物として報ず可きもの無し。受言じく忸怩じくたり、書言謝し難し。中心之れを銘ず。

(『精里全書』巻二十五、「近世儒家文集集成」15、ぺりかん社、一九九六年)

と感激の面持ちで謝意を表している。これによって佩川は李顕相に認

められたことがわかるが、六月二十六日の以酌庵における「筆語」によれば、佩川は李顕相から、

此の印、僕の手づから鑄くわる所にして、以て佩川に呈す。一片の心こころ情、永く以て忘れざらんことを。 (同上)

という言葉添えて、自刻の両面印を贈られている。そこには「一面に『天下の事、唯だ偶然なる者を佳と為す』、一面に『通信製述』と彫られていた(図4)。そこで佩川は、

先生、石を鑄るを以てす。小子、豈に心に刻まざらんや。(同上)と答えている。「心に刻」んだというのが単なるレトリックでなかったことは、それから二十七年後の天保九年に、五十二歳の佩川が「古川霞庵所藏書画帖に跋す」のなかで、次のように回想していることによつて確かめられる。

余は昔、対馬の行に陪す。韓客と会礼の余、文墨相得て甚だ歎す。就中、李太華は其の佩ぶる所の印を解きて、以て一顆を留贈す。両面に刻して曰く、「通信製述」と。又た曰く、「天下事唯偶然者為佳」と。此の事、今に到るまで、危ほとんと三十年。印面の偶然の字を觀みる毎に、未だ嘗て恍として当日を感想せずんばあらざるなり。

偶然の二字、独り当日を感想するのみならず、更に復た一感有り。余は頃ろ乏しきを承けて修業館の前に移居す。此の数日、古川君德基、来たりて北隣に住む。館と唯だ一小渠を隔つるのみ。坐して相呼応す可し。所謂る偶然なる者も、亦た佳よからずや。

君、性敏にして学を好み、古典を博考し、兼ねて書画を善くす。余も不敏なりと雖も、同に微尚存す。朝夕往来して、相得て歓を為す。蓋し亦た偶然なり。

德基は江都の邸に生まれて、公と同庚なり。幼より閣下に侍り、勤勞多年なり。新たに恩秩を賜り、以て家を起こす。韡も亦た草茅を以て拔擢を忝くし、教職を濫りにす。顧みて今代に及び、恩拔を蒙る者、唯だ德基と韡と二人のみ。感遇同一、毎に慨然として相語る。輸報如何に及びては、抑も亦た偶然ならざらんや。
(後略) (『戊戌文章』、西尾図書館岩瀬文庫藏)

「文墨相得て」とは書画を交換しあうことであるが、李顕相は書画ばかりでなく「佩印」を解いて、「一片の心情、永く以て忘れざらんことを」という一言を添えて佩川に贈った。この李顕相の「天下の事は唯だ偶然なる者を佳と為す」という「心情」はしかし、若い佩川に伝わるにはしばらく時間を要したことであろう。

「偶然とはあることもないこともできるもの(中略)がヒョッコリ現実面へ廻り合わせた」ものであると、九鬼周造は「偶然と運命」で述べている(『九鬼周造随筆集』岩波文庫)。しかし同じ偶然にしても、幸と不幸とは大違いだ。たとえば『山月記』の主人公李徴のように、

偶因狂疾成殊類 偶たま狂疾に因り殊類と成る
災患相仍不可逃 災患相い仍つて逃る可からず

(中島敦『山月記』、『中島敦全集』I、ちくま文庫)

というようなことになったら大変である。「廻り合わせ」をすなおに喜ぶには、仕合わせであることが前提となる。

李顕相と佩川が対馬で出会ったのはまさしく「偶然」だった。その偶然の出会いが素晴らしかったことは疑いを容れない。しかしそのとき、「偶然を佳とする」信念を受け継ぐまでには至らなかつたのではないか。その信念を不動にしたのは、古川霞庵との出会いである。続く「一感」はこうして生まれた。「乏しきを承け」とは、任務に就くことを謙遜していうことば。「修業館」は佐賀藩学の一。「古川君德基」は、藩主鍋島直正(一八一四〜七二)の近習頭、古川松根(一八一三〜七二)で、幼少より直正の相手役を務め、文政十三年(一八三〇)に十人扶持を拝領している。「小渠」は溝。「微尚」は自分の好尚を謙遜した言い方。「公と同庚」というものの、実際は一歳違ひだった。「閣下」は高位者に対する尊称。「恩秩」は君主から賜る俸禄。「草茅」は民間ないし在野の意であるが、ここは陪臣の意。「教職を濫りにす」とは、佩川が天保六年より弘道館に勤め、同八年には直正の伴読として「御直一代侍」となったことなどを指している。こうした仕合わせ者同士が「偶然」に出会ったわけであるから、「佳」であるのも当然であろう。

そうした現在の仕合わせを佩川は若かりし日の思い出のなかにたどり直して、李顕相の一言をかみしめている。この印を捺すたびに、その思いは強まったにちがいない(図5、「雪中竹図」(部分) 多久市郷土資料館蔵)。

4

李顕相はまた松崎慊堂(一七七二〜一八四四)に向かつて、

金公魯敬、字可一、酉堂と号す。文章甚だ高し。僕常に隣居して交わり厚し。今、行篋を捜し、適たま一小冊子有り。茲に以て贈

り奉らん。

〔「接鮮瘖語」上、『慊堂全集』二十三、崇文院、一九二六年〕

と述べて、金魯敬の「一小冊贈本」を贈っている。この金魯敬が長子の金正喜（一七八六〜一八五六）を伴って燕行に登ったのが、一八〇九年（純祖九年、嘉慶十四、文化六）のことで、正喜は翁方綱（一七三三〜一八一八）や阮元（一七六四〜一八四九）に学んで帰国し、各方面に大きな足跡をのこした。その詩「人を懐しむ詩体に仿う。旧聞を歴叙して、転じて和舶に寄す。大坂浪華間の諸名勝、当に之れを知る者有るべし。十首」のうちには、大勢の日本人が登場するが、ここで注目したいのは次の一首である。

篆刻有漢法 篆刻に漢法有り

精雅兼葭堂 精雅 兼葭堂

古梅御油烟 古梅 油烟を御し

直欲抗程方 直ちに程方に抗せんと欲す

借問長崎舶 借問す 長崎の舶

西梅翰墨光 西梅 翰墨の光

〔『阮堂先生全集』九、「韓国文集叢刊」301〕

「篆刻に漢法有り」とは、秦漢の古法に溯ること。「精雅」は清らかで上品なこと。兼葭堂の篆刻を正喜も『東華名公印譜』で目にしたのかもしれない。「古梅」は奈良の墨の老舗、古梅園。「油烟」は樹脂を不完全燃焼させて生じさせた炭素粉で、墨の原料となる。古梅園製の墨は、「程方」すなわち明の程君房と方于魯の墨に匹敵するというのである。程・方両氏には、それぞれ『程氏墨譜』と『方氏墨譜』が伝わっている。この情報源もまた成大中であろうか。というのも『両好

余話』巻下の「墨題辞」が伝える、仙樓すなわち奥田尚斎、名元継（一七三三〜一八〇七）の言に、

君、懇求する所の古梅園制墨、質し得て之れを致す。此れ其の中心なり。然れども磨するに非ざれば其の精麁を弁じ難し。之れを要するに、必ず当に製墨家の言の較や信有りて、果たして銜売の徒に非ざるに頼るべし。

（宝曆十四年序刊本、東北大学狩野文庫蔵本）

とあるからである。

ともあれ、こうして兼葭堂の篆刻で始めた小論を、ゆくりなくも金正喜による兼葭堂へのオマージュで結ぶことができるのも、「偶然を佳と為す」ささやかな一例となるならば幸いである。⁽⁶⁾

注

(1) 中国における篆刻の歴史をコンパクトに伝えるものに、羅福頤・王人聰『印章概述』（中華書局、一九七三年）がある。近世の篆刻については、石川九楊編『書の宇宙』23「一寸四方のひろがり・明清篆刻」（二玄社、二〇〇〇年）が通覧に適している。本文中に引用した水田先生の『日本篆刻史論考』は必読である。

(2) 『湛軒書外集』所収の「杭伝尺牘」以下の諸文献、ならびに拙稿「十八世紀東アジアを行き交う詩と絵画」（『蒼海に交わされる詩文』東アジア海域叢書13、汲古書院、二〇一二年）、および「通信使行から学芸の共和国へ」（『日本近世文学と朝鮮』アジア遊学163、勉誠出版、二〇一三年）などを参照されたい。

(3) 水田紀久氏「葛子琴」（『近世浪華学藝史談』中尾松泉堂書店、一九八

六年) 参照。

(4) 東江について、南玉は二月二十五日の『日観記』に、「平鱗、号東江、印章に工みなり。関白の印宝を為る者なり」と記し、三月二日には、「平鱗、多胡郡碑を送致す。乃ち日東千年の古筆なり。略ぼ瘞鶴銘に似て、骨氣無し。蚯蚓の如きも、猶お古意有り。鱗は窮山廢址中に得ると云う」と記している。「多胡郡碑」は日本三古碑の一。「瘞鶴銘」は南朝梁の磨崖の一。「蚯蚓」はミミズ。さらに七日には、「魯堂・周宏来たる。宏、平鱗が刻する所の印一方を致す」と見え、東江の印一顆を周宏が持参したことが知られる。さらに十一日には重ねて、「平鱗、印章を贈る」という記述があり、大中も同日の日記に、「平鱗・平英・韓天寿来別、…鱗は印章二を贖る。天寿は筆三を贖る。各おの紙筆を以て之れを謝す」と記している。さらに元玄川に至つては、「平鱗の人と為り、笠として氷玉の如く、容止安詳、辞令恭謹、眉清く目朗らかにして、人をして之れを愛して離るるを欲せず」とさえ記している(『乗槎録』三)。なお東江の法帖仕立ての『来禽堂詩草』(安永七年刊)には、「送別朝鮮四文客」以下、通信使に贈つた詩が何首か収められている。

(5) 吉備国際大学教授守安収氏のご紹介によつて知ることを得た、岡山県記録資料館館長定兼学氏のご教示によれば、三実は中村岳洲(一七七七〜一八五〇)の父の可能性がある。岳洲については、『夢遊編 付済勝漫録』(太平文庫53、太平書屋、二〇〇五年)所収の拙稿解説「圃公何人ぞや」でやや立ち入つて論じたことがある。父長大夫は御先歩行を務めていた。

(6) 金正喜については、拙稿「金正喜の肖像」(濱下昌宏先生退職記念論集)同編集委員会編、近刊)を参照されたい。

【付記】小論は二〇一三年五月十一日、ソウル大学校で開催された韓国18世紀学会の春季大会で発表した原稿に、最小限の手直しを施したものである。

小論で使用した文献は、注記したもののほか、『日観記』『槎上記』『乗槎録』の諸本はすべて漢陽大学校の鄭珉氏より送つていただいた複製に依る。

わずかに一週間前に提出した原稿に韓国語訳を付すという離れ業で、当日配布された予稿集のタイトルに、「二〇一三年春韓日18世紀学会連合学会」と記されていたのは、今回、日本18世紀学会から私を含めて五名が大量参加をしたからである。大会のあいだ韓国18世紀学会の会長安大会先生・開催校のソウル大学校の鄭炳説先生やスタッフの皆さんには一方ならぬお世話になった。毎度のことながら、周到なホスピタリティーには感謝の言葉もない。当日、同時通訳の任に当たられた高麗大学校の金時徳氏は、今回も翻訳の取載を快諾され、韓国の読者のためにここに併載することを得た。同氏はまた学会の準備段階から様々な連絡を一手に引き受けてくださり、そのために私ども日本からの参加者はあたかも国内学会に参加するような気安さで行動することができた。心より御礼を申し上げる次第である。

三日目は、春秋恒例の潤松美術館展の初日に当たっていたが、近年ますます人氣が出てすぐには入場できないかもしれないという情報を得て、行く先を中央博物館に切り換えたところ、八年来のテーマである趙熙龍の作品をたまたま何点か見ることができた。そのうえ貴重な資料も入手して、「偶然を佳と為す」ことをしみじみ実感した三日間だったことを報告して、関係各位に重ねて深甚の謝意を表す。

なお草場佩川については、拙著『草場佩川』佐賀偉人伝11(佐賀城本丸歴史館、二〇一三年二月刊予定)をも参照されたい。

一連の研究は、平成二十二年より継続中の科学研究費助成事業(基盤研究(B))「公共知の形成―東西比較による18世紀学の展開」(課題晩号・22320025)によるものであることを付記する。

전각이문 (篆刻異聞)

다카하시 히로미

1

전각은 일촌사방(一寸四方)의 서예술(書芸術)로서 문인들 사이에서 사랑받아왔다. 이번에는 이 작은 도구가 통신사행(通信使行)에 의한 조선과 일본간의 교류에서 행한 적지 않은 역할에 대해 보고하고자 한다.

이를 위해서는 그 유명한 기무라 겐카도(淸景兼葭堂, 1736-1802)의 활동을 언급해야 한다. 겐카도와 후쿠하라 쇼메이(福原承明, 1735-68)에 의한 『동화명공인보(동화명공인보)』(고리(合離) 호소아이 도난(細合斗南) 서문, 1764년 간행)이야말로, 동아시아 학예공화국의 형성을 촉진한 중요한 기념비이기 때문이다(그림 1). 겐카도의 활동은 전각뿐 아니라, 《겐카 아집도(兼葭雅集圖)》의 만들새에 의해서도 서울의 지식인들의 주목받는 바가 된다. 홍대용(1731-83)은 「도난의 재주, 겐카의 그림, 쇼메이의 글」등을 거론하여 이들 「종종풍치(種種風致)는 즉 우리 나라에서 논할 바가 없다. 이를 제로강좌(齊魯江左)에서 구하고자 해도 역시 쉽게 얻을 수 없다」(『日東藻雅跋』, 『湛軒書』三)고 절찬하고, 2년 후에 이와 같은 문인을 찾아 베이징이 가게 되는 계기가 되었다. 그 후의 전개는 『담헌서 외집(湛軒書外集)』에 수록된 「항전척독(杭伝尺牘)」이하의 여러 글과 이덕무 「천애지기서(天涯知己書)」(『靑莊館全書』六十三) 등 여러 서적을 통해 알려진 대로이다.

『동화명공인보』과 함께 근년 간행된 『가쓰 시킨 전각집(葛子琴篆刻集)』(太平文庫 66, 2010년)을 보면, 성대중(1732-1809)과 원현천(元玄川, 1719-90)을 위해 새긴 인영(印影)이 실려 있다(그림 2). 가쓰 시킨(1738-84)도 겐카도 그룹의 일원으로 「나니와(浪華: 오사카)스타일」을 체현하여, 오사카의 야교(雅交)에서 빼놓을 수 없는 인물이었다.

2

이리하여 각지에서 받은 인영을 성대중은 귀로의 배에서 비교하고는 다음과 같은 평가를 내린다.

나카무라 산지쓰는 인장 6과를 새겨 보냈다. 시온(淸韞) 9과, 퇴석(退石)·현천(玄

川) 각 2과, 또 각각 사인보(私印譜) 1권을 보낸다. 일본인은 원래 인장을 잘 만들어서, 이른바 『일도만상(一刀万象)』이라는 책이 오늘날까지 천하에 이름을 얻었다. 살펴보니 산지쓰가 가장 좋다. 에도의 사와다 도코, 교토의 조 세이후는 그 다음이다. 오사카의 기무라 겐카도와 후쿠하라 쇼메이는 또 그 다음이다. (『榎上記』五月十五日条)

『일도만상(一刀万象)』 3권은 1713년 이케나가 도운(池永道雲)이 만든 「우리나라 인보 중 굴지의 명보」(水田紀久氏「日本の印譜」, 『日本篆刻史論考』靑裳堂書店, 一九八五年)였다. 그러한 배경에서 전각취미가 서서히 침투한 결과 나카무라 산지쓰(中村三実)가 베스트(그림 3), 「평린(平鱗)」 즉 사와다 도코(沢田東江, 1732-96)와 「장공훈(長公勳)」 즉 조 세이후(長靑楓, 1716-74)가 차선, 겐카도와 후쿠하라 쇼메이는 「또 그 다음」이라는 평가가 된 것이다. 라이 슌수이(賴春水, 1746-1816)는 『재진기사(在津紀事)』상권에서 「시킨은 생(笙)과 필률을 잘하고 전각은 묘수였다」(『春水遺稿別錄』一)라고 높이 평가하고 있으나, 성대중의 안목에는 미치지 못했던 듯 하다.

그래서 주목되는 것이 나카무라 산지쓰인데, 유감스럽게도 현재 상세한 사항은 알 수 없다. 산지쓰로부터 「9과」를 받은 시온 남옥(南玉, 1722-70)의 일기에는 1764년 1월 14일에 「우시마도(牛窓)」에 도착했을 때 비젠번(備前藩) 유학자들의 송영을 받은 인상을 다음과 같이 적는다.

이 주(州)의 유학자에게는 매우 문아의 예모가 있다. 지닌 바의 문방(文房) 역시 모두 좋으며, 종이는 중국 것이 아니면 쓰지 않는다 한다. (『日觀記』第七)

이 때 비젠번 유학자가 「지닌 문방」은 모두 「정호(精好)」하여 세련되며 「문아의 예모」를 지니고 있었다고 한다. 이리하여 「비젠 풍아(備前風雅)」에 마음이 동했을 때,

와다(和田)가 그 친구 나카무라 산지쓰의 인보(印譜)의 서문을 청하다. 산지쓰, 자는 자매(冢楳), 인(印)은 모두 75개, 각각의 체를 갖추다. 인학(印學)에 조예가 깊은 자임을 알 수 있다. 그 보를 곁에 두어 서문을 쓰겠다고 했다.

라는 전개를 보이며 감탄의 정도는 한층 깊어졌다. 「와다(和田)」는 「와다 쇼(和田邵), 호 일강(一江), 비젠번의 문학(文學)」이다. 그 일강이 남옥을 향해 말한다.

나의 친구 가운데 나카무라 하료(中村巴陵)라는 자가 있다. 인장을 전각하는 것을 좋아하는 성격이다. 일찍이 인보를 새겼다. 제군이 서쪽에서 온다고 듣고 나를 통해 작은 재주를 보이려고 청하였다. 그리하여 이를 가지고 왔으니 공충(倥偬)한 가운데라 하더라도 한 번 이를 보시고, 만약 몇 마디를 권두에 얻을 수 있다면 이 어찌 하료만의 기쁨이라, 나에게도 큰 기쁨일 것이다. 지촉(至囑) 지촉.

「공충(倥偬)」은 일이 많아 바쁜 모양. 「지촉(至囑)」은 의뢰한다는 뜻의 간찰 용어. 남옥은

이에 대한 답으로,

인장은 내가 매우 좋아하는 것이니 마땅히 책에 글을 적어 돌려보낼 것이다. 다만 아직 하료와 대답하지 못한 것이 한스러울 뿐이다. 만약 족하의 소개를 얻어 하료의 솜씨로 천명과(賤名) 과 호자(号字) 를 새겨 받아 돌아갈 수 있다면 기쁠 것이다. 여하(如何) 여하.

라고 전각에 각별한 관심을 보이고 「내가 구하고자 하는 바를 마땅히 녹봉(錄奉) 해야할 것이다」라며,

몇 개의 명인(名印) 을 얻고자 한다. 큰 것은 필요하지 않다. 다만 「기(奇)」해야할 것이다. 아직 많이 얻음을 원할 수는 없겠지만, 바라건대는 점찍은 것 3, 4 개를 얻고자 한다.

라고 주문했다. 이 때 남옥은 「특별히 인형을 그려 이를 보이다. 그 가운데 점을 찍은 것이 있다」 고 할 정도로 열심이었다. 크기보다도 다만 「기(奇)」 할 것을 요구받은 점이 주목된다. 성대중 역시,

인보는 모두 기품(奇品) 이다. 한 번 그의 재주를 빌려 나의 성과 이름을 군옥(群玉) 에 남기지 못함이 한스러울 뿐이다.

라고 하여 「기품」 임을 인정한다. 그리고 「모두 새길 수 있다면 가장 다행이다. 만약 이 바램이 이루어지기 어렵다면 점 찍은 것을 얻고자 한다」 고 주문한다. 할주(割注) 에 「인형을 그려 이를 보이다. 그 가운데 점을 찍은 것이 있다」 고 할 정도로 남옥을 능가할 정도의 집념이었다(그림 4). 나아가 까다로운 김퇴석(金退石, 1707-72) 조차 「굳이 많이 원하지 않는다. 다만 이 일투(一套) 에 대해 승락을 얻을 수 있을지」 라고 하여 「인형 한 개를 그려 보이다」 라고 주문하고 있다. 원현천도 「필현정초(筆硯整楚)」 라고 하여 문방구의 훌륭함에 언급함으로써 남옥의 앞서 관찰을 보충한다(『乘槎錄』 二).

이리하여 산지쓰의 전각은 처음부터 일행의 관심을 끌었다. 이 열렬한 의뢰에 와다 쇼도의 의외였던지,

하료는 격무에 시달리고 있으니, 돌아가실 때까지 조각할 수 있을지 없을지 모르겠다. 가부는 답하기 어려우나 제군을 위해 이를 전하리라.

라고 신중히 답한다. 이에 대해 남옥이,

하료에게는 아직 반소(半霄) 의 아(雅) 가 없구나. 어찌 덧붙여질 것을 바라랴. 다만 이방의 진기한 물건으로 미가(米家) 을 삼으려 한다. 깨닫지 못한 채 바라는 바의 것을

자랑한다. 다만 현명한 자는 이를 용서하라. (同上, 卷二)

라고 덧붙인다. 「반소(半霄)의 아(雅)」는 「반소(半宵)」일지. 「미가(米家)의 보물」은 미불(瞿芾) 소장의 명품에 견준 것이다. 과연 귀로의 4월 15일자 남옥의 일기에는,

이치우라 나오하루(市浦直春)가 나카무라 산지쓰가 새긴 인장 9과를 전하다. 전각은 평린에게 크게 앞선다. 다양한 색의 화간(花簡)으로 사례하다. (『日觀記』第九)

라고 적혀 있으므로, 일행의 바람에 나카무라 산지쓰는 충분히 답했음을 알 수 있다. 앞서 본 성대중의 평가와도 일치한다. 이 때 인장을 지참한 「이치우라 나오하루」는 「호는 남죽(南竹), 비젠의 문학」이었다. 서울에서의 반향은 어떠했는지.

3

한편 1811년, 최후의 통신사가 쓰시마에 왔을 때 제술관은 이현상(李顯相), 호는 태화(太華)였다. 이를 맞이한 사람들 가운데 고가 세이리(古賀精里, 1750-1817)을 수행한 구사바 하이센(草場佩川, 1788-1867)이 포함되어 있었다. 시화를 잘 한 하이센은 극명한 기록을 남기고 있는데 (『津島日記』西日本文化協會, 一九七八年), 필담을 모은 『대례여조(對禮余藻)』의 「23일의 필어(筆語)」에서 주목되는 것은 태화가 출항할 때 김조순(金祖淳, 1765-1832)에게서 받은 선면(扇面)을 「지금 하이센 족하를 보니 즉 해상의 귀인이라. 이를 증정할테니 정을 잊지 마시라」라고 하여 하이센에게 다시 선물한 것이다. 하이센은,

이 부채가 아름답다. 하물며 당당한 명공(名公)의 글까지 있으니. 야인(野人)은 물건으로써 이를 보답할 길이 없다. 주신 말씀이 황송하니 글로써 사례하기 어렵다. 마음 속에 이를 새기리라.

라고 하여 감격스러운 표정으로 사의를 표한다. 또한 주목되는 것은 6월 26일자 이테이안(以酌庵)에서의 「필어(筆語)」이다. 하이센은 이태화로부터,

이 인장은 내가 손수 가져 온 바, 이를 하이센에게 준다. 한 조각 심정을 영원히 잊지 말라.

라는 말과 함께 직접 새긴 두 면의 인장을 받는다. 거기에는 「일면에 『천하의 일은 다만 우연을 아름답게 여긴다』, 일면에 『통신제술(通信製述)』이라 새겨 있었다(그림 4). 그래서 하이센은,

선생이 둘에 새기셨으니 소자가 어찌 마음에 새기지 않을 수 있으랴.

라고 답한다. 마음에 새겼다는 말은 단순한 레토릭이 아니었으니, 그로부터 27년 후인 1838년에 52세의 하이센이 「후루카와 가안 소장 서화첩에 발하다(古川霞庵所藏書畫帖に跋す)」 가운데

다음과 같이 회상하고 있는 것을 보아도 명백하다.

나는 옛날에 쓰시마의 행차에 참석했다. 한객(韓客)과 회례함에 문묵(文墨)을 서로 얻으니 매우 기뻐다. 특히 이태화는 그가 소장한 인장 한 과를 내게 주었다. 양면에는 「통신제술」 「천하의 일은 다만 우연을 아름답게 여긴다(天下事唯偶然者為佳)」라는 말이 써 있었다. 이 일은 지금으로부터 거의 30년. 인면(印面)의 “우연”이라는 글자를 볼 때마다 황홀하여 당시를 생각하게 된다.

우연이라는 두 글자. 홀로 그 때 일을 감상할 뿐 아니라 또한 한 가지 느끼는 점이 있다. 나는 마침 명을 받아 수업관(修業館) 앞으로 옮겨 살았다. 그간에 후루카와 마쓰네(古川松根, 古川德基) 군이 와서 북쪽에 이웃했다. 관과의 사이에 작은 개천이 하나 있을 뿐이었다. 앉아서 서로 부를 수 있었다. 이른바 우연이나 또한 아름답지 않은가. 후루카와 군은 성격이 민첩하고 배움을 좋아하여 고전을 널리 궁리하고 더불어 서화를 잘했다. 나도 불민하나 마찬가지로 취미를 함께하여 아침저녁으로 왕래하며 서로 기뻐했다. 이 또한 우연이다.

후루카와는 에도의 저택에서 태어나 나베시마 나오마사(鍋島直正) 공(公)과 동갑이다. 어릴 때부터 각하를 모시고 다년간 근면히 일했다. 새로이 은질(恩秩)을 받아 집을 세웠다. 나 역시 초야에서 발탁되어 교직을 참람되어 하였다. 돌이켜보면 지금에 이르러 은혜로이 발탁된 자는 도쿠키와 나 뿐이다. 감우동일(感遇同一), 늘 개연히 서로 이야기한다. 이 또한 우연이 아니겠는가(후략) (『戊戌文草』)

「문묵을 서로 얻으니」란 서화를 교환하는 것을 말하는데, 이현상은 서화 뿐 아니라 「차고 있던 인장(佩印)」을 풀어 「한 조각 심정을 영원히 잊지 말라」는 말을 더하여 하이센에게 주었다. 그러나 이때는 아직 「천하의 일은 다만 우연을 아름답게 여긴다」라는 신념이 전해지지 못했다. 그 신념을 부동의 것으로 한 것은 후루카와 가안과의 만남이다. 이어지는 「일감(一感)」은 이리하여 탄생했다. 동시에 하이센은 이 때, 이태화의 「한조각 심정」을 새삼 이어받았음에 틀림없다. 「수업관(修業館)」은 사가번(佐賀藩) 번교(藩校)의 하나. 「후루카와 도쿠키 군(古川君德基)」은 번주 나베시마 나오마사(鍋島直正, 1814-71)의 긴주가시라(近習頭)인 후루카와 마쓰네(古川松根, 1813-71). 「공과 동갑」이라고 하지만 실제로는 한 살 차이가 난다. 「은질」은 군주로부터 받는 봉록. 「교직을 참람되어 하다」란 1835년부터 홍도관(弘道館)에 근무하고 1837년에는 나오마사의 공부상대(伴讀)가 된 것 등을 가리킨다. 이렇게 행복한 자들이 우연히 만났으니 아름답지 않을 리가 없다.

그러나 아무리 우연히 멋지다 해도 행운과 불행은 큰 차이가 난다. 똑같이 우연이라고 해도 예를 들면 소설 『산월기(山月記)』의 주인공 이징(李徵)과 같이

偶因狂疾成殊類 우연히 광질에 의해 수류(殊類)가 되니
災患相仍不可逃 재환이 맞물려 피할 수 없으리라.

(中島敦 『山月記』, 『中島敦全集』 I, ちくま文庫)

라는 식이 되면 큰일이다. 「우연한 만남」을 순수하게 기뻐할 수 있는 것은 행복한 사람들끼리이다.

덧붙여 말하면 하이센은 이 인장을 때때로 낙관에 사용한다. (그림 5)

4

이태화는 또 마쓰자키 고도 (松崎慊堂, 1771-1844) 에게,

김노경 (金魯敬) 공, 자는 가일 (可一), 호는 유당 (酉堂). 문장이 매우 높다. 나는 늘 이웃에 살며 두터이 교유를 맺어왔다. 지금 여행꾸러미를 뒤적이니 마침 소책자 한 권이 있다. 이를 선물하리라. (『接鮮瘖語』上, 『慊堂全集』二十三, 崇文院, 一九二六年)

라고 하며 김노경의 「일소책등본 (一小冊騰本)」을 선물한다. 이 김노경이 맏아들 김정희 (1786-1809) 를 대동하고 여행길을 나선 것은 1809년. 김정희는 옹방강 (翁方綱, 1733-1818), 완원 (阮元, 1764-1849) 등으로부터 배운 뒤에 귀국하여 각 방면에 거대한 족적을 남겼다. 그 시 「사람을 그리워하는 시체를 본뜨다. 예전에 들은 바를 서술하여 일본으로 가는 배에 붙이다. 오사카 나니와 사이의 여러 명승들은 의당 이를 알 자가 있으리라. 10수 (仿懷人詩體 歷敘舊聞 轉寄和舶 大板浪華間諸名勝 當有知之者. 十首)」에는 많은 일본인이 등장하는데, 여기서 주목하고 싶은 것은 다음의 시이다.

篆刻有漢法	전각에 한의 법이 있으니
精雅兼葭堂	정아한 겐카도
古梅御油烟	유연이라 고매원 (古梅園) 라는 제목 (製墨) 을 보면
直欲抗程方	곧 정군방 (程君房) ·방우로 (方于魯) 과 대항할 만하다
借問長崎舶	나가사키의 배에 빌려 묻는다;
西梅翰墨光	서매의 한묵빛이 어떠한가

(『阮堂先生全集』九)

「전각에 한의 법이 있다」는 것은 진한의 고법 (古法) 으로 거슬러올라가는 것. 「정아」란 맑고 우아한 것. 겐카도의 전각은 김정희도 『동화명공인보』를 통해 보았던 것일지. 「고매 (古梅)」란 나라의 오래된 떡 가게 고매원 (古梅園). 「유연 (油烟)」은 수지를 불완전연소시켜 나오게 하는 탄소가루로, 떡의 원료가 된다. 고매원에서 만든 떡은 「정방 (程方)」 곧 명의 정군방 (程君房) 과 방우로 (方于魯) 의 떡에 필적한다는 것이다. 정방 양씨에는 각각 『정씨묵원 (程氏墨苑)』과 『방씨묵보 (方氏墨譜)』가 전한다. 이 정보원도 성대중일지 모른다. 왜냐하면 『양호여화 (兩好余話)』 하권의 「묵 제사 (墨題辭)」가 전하는 선루 (仙樓) 즉 오쿠다 쇼사이 (奥田尚齋), 이름 모토쓰구 (元繼, 1733-1807) 의 말에,

군이 간절히 찾는 고매원제목을 구입하여 보낸다. 이는 그 중 중품 (中品) 이지만 알아보지 않으면 그 정밀함과 거침을 구분하기 어렵다. 요컨대 반드시 제목가의 말의 비교함과 믿음이 있어, 과연 사람을 홀려 장사하는 무리가 아님에 의존해야 할 것이다. (1764년 序刊本, 東北大学狩野文庫蔵本)

라고 보이기 때문이다.

겐카도의 전각으로 시작한 소론(小論)을 뜻밖에 김정희에 의한 겐카도예의 오마주로 끝맺을 수 있었던 것도 「우연을 아름답게 여기는」 사소한 일례가 된다면 다행이다.